

藤  
焼  
展  
観  
の  
会

— 多治見市モザイクタイルミュージアム特別展示開催記念 —





## 「藤焼 展観の会」開催にあたって

大正から昭和初期にかけて活躍した建築家の藤井厚二(1888-1938)は、真に日本の気候風土や日本人の感性に適合した「日本の住宅」の理想形を追求したひとりとして近年特に注目を集めています。

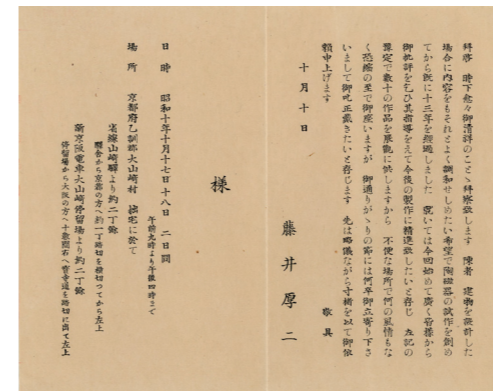
藤井は、建物だけに留まらず、家具、照明など生活にまつわる全てのものを、建物に調和させるべくデザインしました。天王山の麓の土地を取得し、第3回住宅を建てた1922(大正11)年頃に、敷地内に窯を設け、陶磁器作品を自ら構想、デザインし、川島松次郎を始め数氏の援助を受けて作陶し「藤焼」と名付けて日常使いしました。そして、代表作品として唯一カラー写真で載せた陶板「水蓮」を含む「藤焼」約30点を写真入りで紹介する『聴竹居作品集二』(田中平安堂刊)を1932(昭和7)年春に発行しています。

「藤焼」に初めて光をあてた特別展示「山内逸三と藤井厚二－聴竹居で育まれたものたち」が、多治見市モザイクタイルミュージアムで2025年10月から2026年2月まで開催されました。

この特別展示の開催を記念して、「藤焼」を「聴竹居」に設えた初めての企画展を開催することになりました。

企画展の会場は、建築家・藤井厚二が第5回自邸として49歳で亡くなるまで家族と共に暮らした「聴竹居」(1928年・昭和3年竣工)で、昭和の時代に建築家が建てた住宅として初めて、2017年に国の重要文化財建造物に指定されました。藤井は、「聴竹居」を日本の気候風土と日本人の感性に調和した当時の最先端の「日本の住宅」として、1930(昭和5)年に英語版の『THE JAPANESE DWELLINGHOUSE』(明治書房刊)にまとめ、世界に向けて発信しています。

今回の企画展は、藤井自らが1935(昭和10)年10月に聴竹居で、「藤焼」を観てもらうために企画・開催した「藤焼 展観の会」の一部を再現する初の試みになります。この企画展を通じて、藤井厚二の「藤焼」にみる「日本の住宅」への想いと「聴竹居」の建築を紐解き、次代の“和文化”のあるべき姿を考える機会になればと思います。



## 藤焼について－展示解説－

寺嶋千春（聴竹居倶楽部 藤井厚二アーカイブス・文化財担当）

1935年10月、藤井は友人、知己に「藤焼展観の会」の招待状を送った（前頁写真）。招きに応じた参加者を記したメモが残っており、久田宗也、堀内宗完、千宗室の著名な茶人や建築関係者、藤井設計住宅の施主、お花やお茶、陶磁器関係者、隣人でもある加賀正太郎夫妻など三日間（16日は内覧会か）で180名以上の人々が聴竹居を訪れ、藤焼を鑑賞した。この展観の会は13年間、陶磁器の研究を続けてきた藤井にとって、最初で最後のものになった。展覧会場は聴竹居。上閑室（閑室）、下閑室（茶室）以外に、家族の住まう本屋のほとんどの空間も会場となった。この時の出展数は75点で、藤井が各部屋への作品配置を検討したと思われるメモものこる。

今回の展覧会はこれらの資料をもとに、藤井が陶磁器、とくに彫刻作品は「和風建築の室内のように清楚端麗な環境で鑑賞せられる場合は著しく其の特徴を發揮する」とした空間を再現し、聴竹居とともにある藤焼を鑑賞していただきたいという趣旨で企画した。以下、このたび展示した主な作品の紹介をおこなう（巻末の展示目録参照）。

本屋客室、床の間に設えた「鶴」(1)は底部がなく伏香炉である。『鉄筋混凝土の住宅』(1931年)に同形の鶴置物が写り、藤焼の陶磁彫刻としては初期の作品。白釉の花器(3)は『瓶史』(昭和六年陽春號)に藤井聴竹居の挿花とともに写っており、(1)と(3)が刊行物に残る藤焼作品の初出である。陶板(タイル)燕麦(5)は現在明らかになっている中では唯一藤焼のタイル作品だ。時計下の棚(床)に鶉(6)が二羽(表紙写真)。藤井と妻、壽子は昭和9年から10年に藤焼の工房前の庭で鶉を飼っていたという。型から抜いた後、粘土が乾く前に仕上げの手が入った跡がある。水蓮(7)は陶板で『聴竹居作品集二』(1932年)では「浴室用陶板」の注釈が付く。(前頁掲出) 鶉(8)には特注の保管箱があり、愛着のある作品だったようだ。牧童(10)は南面の画題である「牧童図」が題材の作品である。牧童と水牛の表情が趣深い色絵付けの作品。朝顔形の湯呑セット(12)は二種、葉の釉調とサイズが異なるがデザインは同じ。昭和5年に藤井が描いたスケッチが残る貴重な資料である（本頁写真）。

下閑室に設えた飛鶴(4)は釣香炉。背部の羽が立ち上がり嘴とともに隙間から香煙がただよい出る造りである。三本の組紐の長さバランスが周到に調整されており、やや下降気味に設えられる（裏表紙の鶴は藤井が撮影させたもの）。雁(15)は三羽それぞれに表情と釉調が異なる（本頁写真）。俵茶碗(16)は豊作を寿ぐ吉祥形で本作品は三島手風である。美人(17)は唐代の樹下美人図に因んだもので色絵付けの力作。鶯(19)は台座の内面に昭和10年秋と筆書きで記されている。展観の会

のために制作されたものだろう。(21)(22)の茶碗は絵付け部分の素地をへらなどで削って立体感を出している。水指(23)は中国から伝わった一閑人という意匠(別名、井戸覗き)が題材となったものだが、唐子は蓋上の水鳥を眺めている。

展示した作品のうち1・4・6・8・9・10・14・15・17・18・19・20が陶磁彫刻で、すべて型作りである。ここでは陶磁彫刻を、いきものと中国美術の影響を受けた意匠や造形の2タイプに分けることができる。制作年代は1932年の『聴竹居作品集二』以前に作られたものが1・4・9・10・14・17・18。6は1934年以降、19は1935年。8・15・20は1935年以前である。なかでも6鶉・8鶉・9鶉・19鶯・20雀は、いきいきとした表情や眼差し、清楚な佇まい、端部までの丁寧な作りこみなど存在感に満ちており、藤井の表現への姿勢を感じさせる作品である。

陶板は現在聴竹居にあるものは4点(うち1点はタイル)と少ないが、絵画的で藤焼のひとつの Kategorii に分類されるものである。

花器・水指・湯呑・茶碗についても大きく2つのタイプに分けられるだろう。1つはデザインや素描を藤井が提示し、制作から本焼きを専門家に依頼したもの。現在、名前が判明している陶芸家としては中国陶磁に精通する大丸北峰がいる。23の水指などがそれに当たるのではないか。2つめは川島松次郎らが藤焼の工房で轆轤をひいたものと素焼きの器を購入したもの。それらは工房で釉掛け、絵付けが施され窯入れした。敷地内の窯場にはマッフル窯や錦窯、少し離れて登り窯があった。京焼の国領素夫、藤井自身が絵付けをした記録も残っている。

1933年(昭和8)5月にブルーノ・タウトが来訪した際(前頁の家族写真はこの頃か)や1935年の展観の会の折には下閑室の茶席で壽子がお点前をし、厚二が床の間に並ぶ藤焼の説明をおこなったようだ。藤井厚二にとって聴竹居という住宅は家族とともに過ごす日々の中で温められ、藤焼を初めとする日本趣味を愉しむ最上の場所だったのではないだろうか。



## 展覧会後記－藤焼の可能性－

清水雄也（多治見市モザイクタイルミュージアム学芸員）

特別展示「山内逸三と藤井厚二－聴竹居で生まれたものたち－」は、10月4日から2月1日までのおよそ4ヶ月間で23,575名の観覧者の目に触れることとなった。施釉磁器モザイクタイルの創成者である山内逸三は言わずもがな、藤井厚二は世界的知名度といえども、彼が制作したやきもの、「藤焼」を中心に据えるのは初めての試みだった。

本展では、藤焼の造形力と国立陶磁器試験所／沼田一雅という時代背景に注目し、動物の陶磁彫刻を主に展観した。例えば代表的な作品と言ってよい鼬や鶉は、型抜き後に顔や目、手足、羽などの要所に人の手をふんだんに加えていること、またそれによる全体の造形の強弱が魅力である。観覧者にも好評で、「鼬に魅かれ、思い切って来ました」という一言は今でも記憶に残っている。

陶芸家であり、1804(文化元)年から続く窯元、幸兵衛窯八代の加藤亮太郎氏をお招きしたギャラリートークでは、先述の特徴に加え、いきものの生命力や魂を感じるもっとも重要な箇所、「目力」の良さを強調された。さらに、藤井が長く生きていれば、注文住宅の中に藤焼も入れ込んで販売していったのではないかと、つまりは、建築と工芸を併せて生活デザインを丸ごと売り出そうとしていたのではないかと、「藤焼」の射程の広がりを示していただいた。このほか、岐阜県重要無形文化財「織部」の保持者である玉置保夫氏や、公益社団法人日本陶磁協会事務局長として『陶説』の編集を行う坂井基樹氏など、陶磁器関係者に高く評価いただけたことも幸いだった。

藤井建築は木造でありながら、幾何学を取り入れたシャープな空間構成が特徴だが、藤井はそのようにして創り上げた場所に、滑らかな自然の曲線をもつやきものを置くことではじめて「暮らし」が完成すると考えていたのではないだろうか。先日改めて聴竹居で藤焼の動植物たちを眺めたときに、なにかこう、ふっと外の世界と繋がっていくような、聴竹居という建物が内側から大山崎の風景の中に溶け込んでいくような、そんな印象を受けた。

冒頭に記した通り、本展で展示した藤焼は全体のほんの一部である。藤井が活動した1910年代から30年代は、彩壺会の活動や関東大震災の影響、そして国立陶磁器試験所という技術的・人的ネットワークの巨大な中心地があり、建築家のあいだで建築陶材や古陶磁などの「やきもの」に大きな関心が集まっていた時代である。藤井はいったいどんな人物と関係をもち、どんな影響を受け、そして何を目指したのか。建築とやきものをめぐる輝かしい時代のうねりの中で、藤井／藤焼の位置を問い直し、その新たな地平を開く日は、すぐそこまできている。

## 展示目録

本屋 客室 —— 1. 伏香炉 「鶴」  
2. 花器 染付 竹林文  
3. 花器 白釉  
4. 香合 「鶴鶴」(せきれい)

居室 —— 5. 陶板 「燕麦」  
6. 置物 「鶉」(うずら)(2)  
7. 陶板 「水蓮」  
8. 置物 「鼬」(いたち)  
9. 置物 「鶉」(う)  
10. 香炉 「牧童」

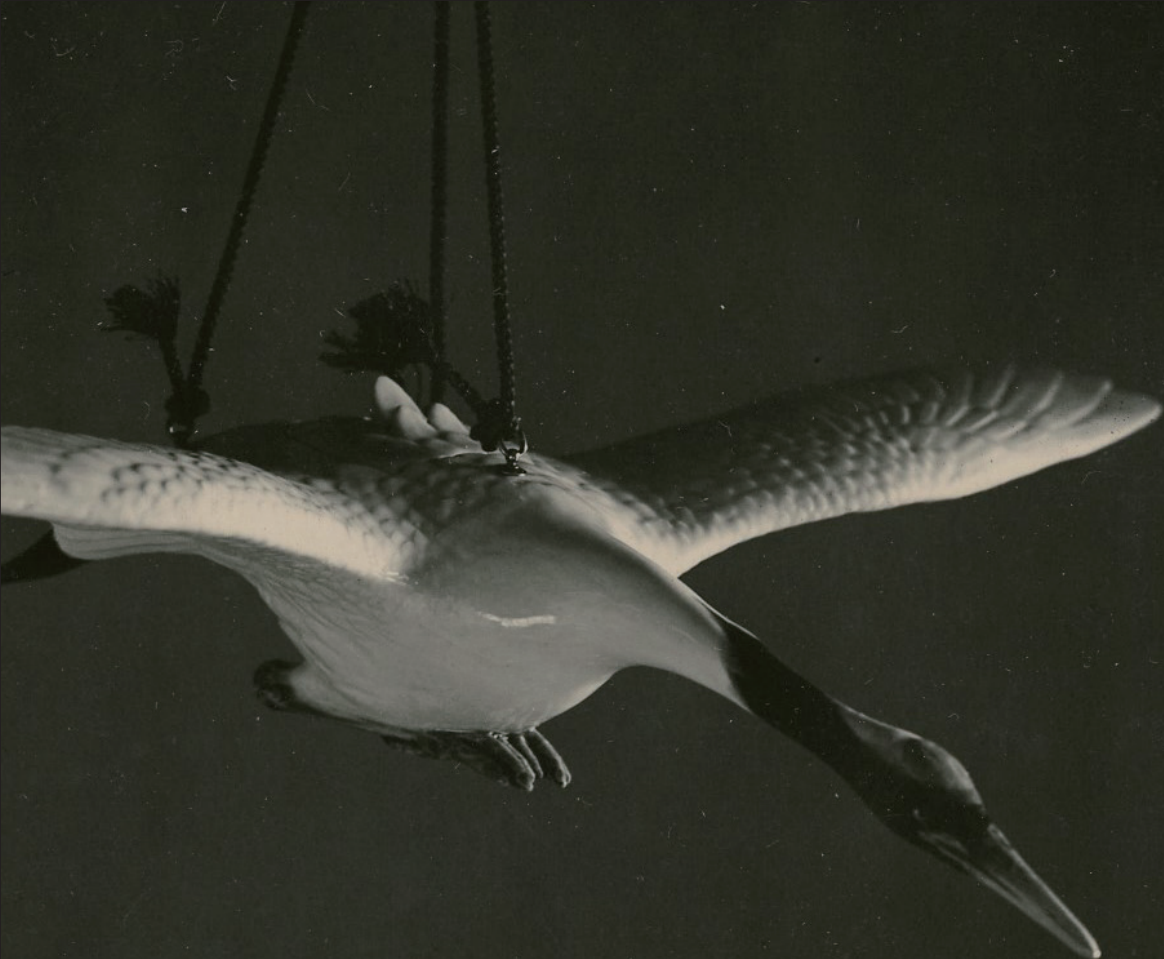
寝室1 —— 11. 水指 染付 吉祥文

食事室 —— 12. 湯呑・受け皿 朝顔花・葉(2)  
13. 湯呑 千筋(2)

茶室(下閑室) 閑室 —— 14. 釣香炉 「飛鶴」  
15. 香合 「雁」(3)  
16. 茶碗 俵  
17. 置物 「美人」  
18. 置物 「観音」  
19. 置物 「鷺」(さぎ)

茶席 —— 20. 香合 「雀」(2)  
21. 茶碗 「白梅」  
22. 茶碗 松  
23. 水指 染付 一閑人





## 藤焼 展観の会

2026年3月17日(火) - 3月29日(日)

主催	一般社団法人 聴竹居倶楽部
共催	株式会社 竹中工務店
協力	多治見市モザイクタイルミュージアム
企画・実施	一般社団法人 聴竹居倶楽部 松隈 章、寺嶋千春、安田演之
会場構成	松隈 章、寺嶋千春、安田演之
グラフィックデザイン	有村菜月
資料提供	藤井厚二アーカイブス(所蔵:竹中工務店)
写真提供	多治見市モザイクタイルミュージアム(撮影:古川泰造、小寺克彦)
図録編集	松隈 章、寺嶋千春
図録印刷	有限会社 修美社